
緋弾のARIA お人よしの梟雄

だしまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア お人よしな梟雄

【Nコード】

N2915Y

【作者名】

だしまき

【あらすじ】

平凡なDランク武偵、松永秋空は三年前のある事件がきっかけで三次元の女に絶望していた。今日も秋空は路上でカップルを見かけると爆発しると念じ、週に一回ゲーム屋で中古のギャルゲーを漁る。そんな平凡だが幸せな日々を謳歌していた。しかし秋空の日常は、道端で出会った一人の少女のせいで一変する。「あんた、私の奴隷になりなさい」

愉快なオリキャラ達による、慌ただしいサイドストーリー・・・的なのを書けたらいいな・・・

プロローグ ～春休み終了のお知らせ～（前書き）

この小説を読むときの注意点です。

- ・この小説は「緋弾のアリア」の二次創作です。
- ・作者は小説を書いて公開するのが初めての素人です。文章表現、構成力はとても稚拙なものです。要するに駄文、駄作です。
- ・「緋弾のアリア」の二次創作なのに、序盤アリアキャラがあんまり出てきません（え
- ・まったく更新します。
- ・オリ設定があります。

以上の五点で一つでもダメな点がある人は、戻ることを強くおすすめします。

プロローグ く春休み終了のお知らせ

目覚めは最悪だった。

頭が痛い。ガンガン痛むわけではないが、こつ、何か圧迫されているような感じ。

ぼーっとした頭で、今自分が椅子に座って、何かゴツゴツしたものに顔を押し付けているのを理解する。

怠い体を起こすと、無機質な黒いパソコンの画面が目映った。さつきまで顔に当たっていたのはキーボードのようだ。

ほとんど無意識の中で右手に握ったものを動かす。これは……無線マウスか。

しばらくして、画面に笑顔でこちらを見つめている蒼い髪の女の子が映った。

「由良……？……そうか、俺、寝てたのか……」

かすれた声で俺は言葉を絞り出した。

そう。俺は昨日買ってきたゲームのCGをコンプリートしようとしていたんだ。ついでに某動画共有サイトで面白そうな動画を探したり、行きつけの某掲示板を覗いてみたり、前期観ていなくて気になっていたアニメを見始めたりはしていたが……とにかく、俺は春休み最後の時間を楽しんでいたわけだ。それがまあ、いつの間にか寝落ちしていたらしい。

画面右下のデジタル時計を見ると、七時六分と表示されている。

四時くらいまでは起きてた記憶があるから、睡眠時間三時間ってところか。何だ結構寝てるじゃないか。

「秋空あき？起きてる？」

不意に、ドアの向こうから控えめに俺を呼ぶ声がした。

「ああ、起きてる」

「あ、よかった。朝ごはん出来てるから、食べに来てね」

パタパタとスリッパの足音が遠ざかっていく。

「秋空っ！おっはよー」

「……抱きつくな。姉さん」

顔を洗ってからリビングに行くと、姉の葉月に後ろから抱きしめられていた。一体、どこに隠れていたのやら。

「えーいいじゃない。……ん？秋空また夜遅くまで起きてたでしょ」

「何でわかるんだよ。てか離れる。制服、皺になるぞ」

「声が疲れてるよー。もう、今日始業式なのに」

「始業式なんて適当に寝とけばいいだろ。それより、飯食うから離れる」

いい匂いのする長い髪が俺の耳元をくすぐり、背中には柔らかい双丘が押し付けられる。男子高校生としては素晴らしいシユチュエーションかもしれないが、相手は実の姉。現実は時に非情だ。

「んー。キスしてくれたら離れてあげる」

「バカな事言ってないでさっさと離れる」

俺は姉さんを無理矢理引きはがすと、椅子に座る。

「パン二枚でいーい？」

キツチンの方から姉さんが尋ねてきた。

「いや、一枚でいい」

「ん、わかった」

机に置かれた新聞を手取る。ニュースなんてどうでもいいが、四コマ漫画と将棋の欄は毎日確認している。

「はい。お待ちどー」

「ああ、ありがと」

皿に乗ったパンと、苺ジャムと、コーヒーがテーブルに置かれる。俺は新聞を置き、ジャムを塗り始めた。

「ねー、秋空」

「ん？」

パンを一口含む。うむ。美味しい。ジャムの甘さが寝ぼけた脳に染み込むようだ。

「今日私、多分帰り遅くなるからご飯先に食べててね」

「ん、わかった。また、依頼か？」

「うん。ごめんね。なるべく早く帰ってくるから」

「ん、了解」

どうやら、また姉さんは何か面倒な依頼を受けたらしい。

依頼、というのは、武偵高校が民間から受け付けている依頼だ。

難易度に応じて報酬と単位がもらえる。

とはいえ、別に姉さんが単位ギリギリなわけではない。留年してはいるが、決して頭が悪いなんてことはない。むしろ姉さんは百年に一度と呼ばれるほどの天才だ。

まあ、むしろその天才っぷりが原因で、学校側からの姉さんへの依頼がたびたび来るのだ。単なる迷宮入りした事件ならまだ簡単な方で、時には同じ武偵高校のSランク生がさじを投げた事件の依頼なんかを受けているらしい。要は学校の信頼を落とさないための尻拭い、というわけだ。

別に強制ではないのだが、おっとりしていて押しに弱く、お人よしな姉さんは受ける必要のない依頼を月に二、三回ほど受けてくるにしても 高校生が探偵業の依頼か。しかもモノによっては命に関わる。

つくづく、普通じゃないよな。あの学校は。

「ごちそうさま」

パンの最後の一口を食べ、残っていたコーヒーが喉に流し込んで、俺は手を合わせた。

時計を見ると 七時十六分。

「姉さん。俺に構わず、さっさと行ってきてくれていいんだぞ？」

「え？いいよ。待ってる」

テーブル前のソファに座って、携帯をいじりながら姉さんは答えた。

「どうせまた学校で会ったし……それに、今日の依頼の資料とか早めに目を通しておきたいんじゃないのか？」

「う、うん。まあ……わかった。じゃあ、先行ってるね。秋空も気を付けてね」

姉さんは携帯をたたむと、脇に置いてあつた鞆を持ってそのまま出て行くこうとする。

「……って、ちゃんと銃持ったか？」

「あ、忘れてた……」

慌てて戻ってくる姉さん。

「気を付けるよ。最近は『武偵殺し』なんてやつもいるんだしな」

「『武偵殺し』？」

「年始に周知メールが出たたる……まあ、もう捕まっただけど」

「……ああ。でもあれ、本当に捕まっただのかなー……」

「……？どういうことだ？」

「いや、何でもないよ」

「とにかく、姉さんはSランク武偵で、狙われやすいんだ。流石に朝っぱらの、武偵高の生徒がうじゃうじゃいる通学路で攻撃されるなんてことはまずないだろうが……気を付けておくに越したことはない」

「はいはい。わかってるわよー。じゃあ、今度こそ行ってくるねー」

「ああ。また後でな」

そんなやり取りの後、今度こそ姉さんは出て行った。

俺も支度を整えて……いや、その前にちよつと、例のゲームのイベントを進めておこう。

自室に戻り、着替えながらだらだらとキャラ達の会話を読み進めていく。朝から可愛い女の子達（二次元）に癒される幸せに思わず頬が緩む。子供には見せられないようなシーンまで行ったところで、俺はセーブしてウインドウを閉じた。

ふと時計を見ると、時刻はいつの間にか七時二十七分を示していた。今から家を出れば七時三十四分のバスになる。

この家はバス停から近いし、まだ余裕で間に合うのだが、これくらい時間になるとバスが混む。混んだバスや電車は嫌いだ。

仕方ない。今から行って、バスが混んでたら歩こう。そして始業式はサボろう。

結局。この日、七時三十四分のバスはめちやくちや混んでいた。乗れないことはないが、俺は押し合う乗客を横目で見ながらスルー。眠気覚ましも兼ねて、のんびり歩いて行くことに決めた。

生涯。

生涯、俺はこの七時三十四分のバスに乗らなかったことを悔やむだろう。

なぜならこのあと、俺は出会うべくして出会ってしまうのだから。
横井琴音に。

地面に女の子が

寝才チ特有の気だるい体を引きずって、俺はようやく武偵高のある人口浮島、通称学園島に辿り着いていた。

途中、コンビニで漫画を立ち読みしてきたからだろう。すでに始業式開始ギリギリの時間になっている。まあ、元々サボるつもりだったし、いつか。

心地よい春の風と、陽気を浴びながらの登校はちょうどいい運動になった。春休み中は運動不足だったせいか、ちよつとしんどいが。

「しゃがります」

「……ん？……遠山？」

今通り過ぎて行った自転車に乗っていた男を見て、俺は呟いた。

遠山キンジ。俺とは顔見知りで、今の自転車に乗っていた人物だ。何やら急いで、というか焦って、しかも何故か周りをしきりに見ていたようだが。しかもなぜかボーカロイドの声も聞こえたし……：：：そう思ってもう一度遠山の方を見直した。

ああ。なるほど。

「チャリジャックかよ。珍しいこともあるモンだな」

つくづくトラブルに巻き込まれやすいな。あいつは。

ここからじゃ見えにくいけど、自転車と並走している無人のセグウェイにスピーカーが乗せられている。それに、スピーカーの影になっただけでほとんど見えないが、棒状の何かが突出しているようだ。多分銃だろう。

さっきの遠山の青い顔とスピーカーから聞こえてきた声を考慮すると、大方『武偵殺し』の模倣犯と言ったところか。随分と暇なことを考える輩がいたものだ。

助けに行こうかと一瞬思うが、どうせこの距離じゃ追いつかないし、何より遠山はあれくらいで死ぬようなやつじゃない。俺が行っても逆に足手まといだろう。

後で生死の確認くらいはしておくか。

それにしても遠山も始業式遅刻とは……あいつ、来年の四月には普通の高校に転入するとか言ってたのに、そんなんで大丈夫なんだろうか。まあどちらにせよ、武偵高がそう簡単に遠山を手放すとは思えないが。

「はっ……ぜえ……ま……待ちな……ぜえ……」
どさり。

「ん？」

思惑にふける俺の耳に、後ろから何か重たい物を落としたような音が聞こえてきた。何事かと振り返ると、

「……え？」

……ちよつと信じられないものを見てしまった。硬直し足が止まると同時に思わず自分の目を疑う。もしかすると、チャリジャックより珍しい光景かもしれない。

倒れているのだ。女の子が。うつ伏せで。

しかも武偵校の制服を着ている。身長から察するに中学生だろう。

「お、おい！大丈夫か！？」

俺は慌てて駆け寄ってしゃがむと、少女を仰向けにした。そして首元を抱え上げて膝に乗せる。

「おい！しっかりし……」

しっかりしろ、と言いかけた先の言葉は出てこなかった。

(か、可愛い……)

その女の子を見て、俺は事態を忘れて思わず釘づけになっていた。整った顔立ち。絹糸のように細い、サラサラとした亜麻色の髪。林檎のような朱色に染まった頬。桜色の唇。そこから漏れる上気した吐息が艶めかしい。

「あ、あんた……」

少女の蚊の鳴くような声ではつと我に戻る。よかった……とりあえず声を発することができないほど衰弱しているわけではないらしい。

「大丈夫か？」

「あんだ……何で……追いかけないのよ」

「え？」

息絶え絶えに少女が何か言ったが、よく聞き取れなかった。

「だから……チャリジャックよ……気づいてたんでしょ？」

「あ、ああ。そのことか。って、もしかしてあれを追いかけてこんなことに？」

苦しそうに少女は頷いた。

「武偵憲章第一条にあるでしょ。『仲間を信じ、仲間を助けよ』って」

「ああ、なるほど。ご立派なこった。けど、大丈夫だ。あの自転車に乗ってるやつは、あれくらいで死ぬようなやつじゃない」

「何で……そんなことをあんだが……」

「あいつとは知り合いだからな。仮にも強襲科アサルトでSランクの武偵だ」
嘘だけど。いや、まあ嘘ではないか。

「そう。よかった」

安心したからか、少女の瞼が徐々に落ちていく。

「お、おい、ちょ、おま……」

「もう……だめ……」

「おい！しっかりしろ！死ぬな！死ぬんじゃないー！」
「……」

糸の切れた操り人形のように、少女の身体から力が抜ける。自然に少女が俺に身を預ける形になるが、彼女の身体は驚くほど軽い。

俺へのツツコミもない。どうやら気を失ったらしい。

「はあ……」

ツツコミのないポケの虚しさのため息をつく。

これから、どうしようか。

それほど遠くないところから、爆発音が聞こえた気がした。

「失礼します」

両手がふさがっているため足で扉を開ける。

「……いないか」

本来教師がいるはずのそこは空席で、机にピーカーに入った薬品やファイルが雑多に置かれているだけだ。

「ここは保健室。こんな物騒な高校だが、怪我の治療は衛生科メディカや救護科ピュラスなる学科が受け持っているため、厄介になる生徒は少ない。ほとんど形だけの部屋だ。

その証拠にベットを見ると、八つある全てが見事に無人。まあ初日から保健室を利用する特殊な生徒がそうそういるとも思えないが、俺は手近なベットに、背負った少女を降ろしてシーツをかぶせた。どうやらまだ気絶しているらしい。目を閉じた少女は精巧な人形のように、気が付くと魅入られたかのように見つめている自分がいる……いかな。どうも相当寝不足らしい。いくらこの子が可愛いからって、普段の俺なら三次元の女の子に見惚れるなんてことはない。

「んん……」

少女がかすかに瞼を震わせた。

「ん……あ、あれ？」

「起きたか」

「私……」

辺りを見た少女は、困惑した顔でこちらを見上げてきた。

「覚えてるか？お前、自転車を追いかけて、俺の目の前で倒れたんだ。ここは武偵高の保健室だ」

「そうだった……って、あの自転車に乗ってた人は……！」

そう言うなり起き上がる少女だが、

「きゅっ……」

「急に起き上がるから……大丈夫か？」

「うっ……」

ゆっくりとまたベットに戻っていく少女。俺は鞆からまだ開けて

いない水の入ったペットボトルを取り出して、少女に手渡した。

「ほら、飲め。遠山……あの自転車のやつなら無事だ。さつきメールで確認した」

「そう……犯人は捕まったの？」

「いや。一応調査中らしい」

さつき周知メールが来た。恐らく犯人は見つからないだろうが。

少女が水を飲む。しばらく沈黙が続く。

「横井琴音」

水を飲み終わった少女は、急にそう口にした。

「ん？お前の名前か？」

「そうよ。今日は助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、俺はもう行くぞ」

少女 横井も無事だったみたいだし、自分のクラスに行こうと俺は手提げ鞆を持って出口の方へと向かった。

「……待つて。ねえ、二つほど聞きたいことがあるんだけど」

横井に呼び止められて振り返る。聞きたいこと、か。一つは予想できるが……さて、なんて答えようか。

「何だ？」

「何で……チャリジャックを見捨てて、私を助けたの？」

まあ、これは正直聞かれるかもとは思っていた。何せ明らかに命に関わるチャリジャックを見逃して、たまたま近くにいた少女を助けたのだから。

「チャリジャックはほっといても何とかなるだろうって思ってたし、あの距離で向こうは自転車だ。走っても追いつかなかっただろうしな」

俺は振り返って壁にもたれかかると言葉を続けた。

「逆にお前は俺の目の前で倒れてたからな。スルーするわけにもいかないだろ」

「ふーん」

興味なさそうに横井はそう言った。自分から振った話題だろうに

……
「逆に聞きたいんだが、何で俺がチャリジャックに気づいてるってわかってたんだ？」

「たまたま聞こえてたのよ。『チャリジャックかよ』って」

「ああ。なるほどな」

そういえばそんなことを呟いたような気がする。

「で、二つ目の質問なんだけど……あんた、もうチームは組んだの？」
「？」

これは完全に予想外の質問だった。質問の意図は全くわからないが、とりあえず答えを返す。

「組んでねーよ。まだ一学期の初日だぞ？」

こんな早くにチームが決定しているところがあつたら、それはよほど自信があるか、よほどバカかのどちらかだ。

「じゃあいいわ。あんた……私の奴隷になりなさい」

さらつと横井が口にした言葉に硬直する。

……何だつて？

「……すまない。もう一度言ってくれるかな？」

聞き間違い、だろうか。今、おおよそ日常生活で明らかに使われない単語を耳にしたような……

「はあ……使えないわね。一回で聞き取りなさいよ。奴隷よ、ド・レ・イ。あんたは今日から私の奴隷なの！」

……市民。奴隷とは何ですか？

ありもしないレーザーガンを取り出したい衝動に駆られる。

「ちょ、ちよつと待て。何だそれは」

「それもこれもないわよ。あんたは私の奴隷になって、一緒にチームを組むの。わかった？」

「……」

あ、頭が痛くなってきた……何だこいつ。

「拒否権は？」

頭を押さえながらそう聞くと、

「あるなら最初からこんなこと言わないわよ」

「……だが断る」

もう限界だ。行こう。

俺は保健室を出て、後ろ手にドアを閉めた。

……今のは、ちよつと理解不能過ぎた。何だかよくわからないけど、忘れよう。きつとそれがいい。

俺は少し足早に、二年の教室に向かった。

その後、俺は何かHホームRルームに間に合い、席にしていた。

二年B組。俺の数少ない友達である遠山キンジ、峰理子とは別のクラスになってしまった。しかも、あまり居心地のいいクラスではない。

パツと見、強襲科っぽいやつは少ないクラスだし、一見問題なさそうに見える。が……

「秋空。今年も一年よろしくねー」

後ろの席から俺に話しかけてくる、その声が俺より一つ年上の姉なのは問題でしかない。

「……よろしく」

……いや、だがそれはまだいい。まだ、いい。姉が留年しているにはわけがあるし、毎年姉とクラスが同じなのはきつと偶然だ。そう信じたい。

それよりも、もつと問題がある。

ちらりと右に視線をやると、

「……」

俺の右の席には女生徒が座っている。俺より少し遅れて教室に入ってきて席に着いたつきり、ずっと本を読んでいる。集中しているらしく、俺の視線には気づいていないようだ。

女生徒の髪の毛に目を移すと、それは見事な亜麻色だ。背は低く、机の高さと首の高さが同じくらい、踵も地面につききっていない。

顔も端正な顔立ちで……間違いない。さっきまで保健室で話していた少女、横井琴音だ。

さっきまで俺のことを奴隷にするなんて言っていたのが嘘のように、静かに本を読む横井は理知的な雰囲気醸し出している。

(本当に……さっきのは何だったんだろう。隣の席なのに何もしてこないってことは、からかってただけなのか)

「はい。ではホームルームを始めます。まずは自己紹介からかな」
いつの間にか教壇に立っていた教師の言葉で我に返る。

担任は去年と同じのようだ。若いのにいつもどこかくたびれていて覇気のない、どうも苦労してそうな男性教師。名前は斎藤京介。

「じゃあ五十音順に。左の列の人から一人づつ……」
「すぎゆぎゅん！」

「……」
今、隣の教室から銃声が二発分聞こえてきた気がするんだが……

「コホン。一人づつ前に来て自己紹介をしてください。名前、専科、趣味、特技だけは必ず言うこと。では、どうぞ」

斎藤先生。どうやらなかったことにしようとしてるらしい。やっぱり、苦労してるな……

「……です。探偵科で、趣味は……」
生徒達も何事もなかったかのように普通に自己紹介をしている。

この学校大丈夫だろうか……

俺の心配をよそに、滞りなく自己紹介が進んでいく。
「……上泉久遠^{かみいずみくおん}。超能力捜査研究科《SSR》。……趣味も特技も特になし」

もう力行か……って、『特になし』ありなのかよ。
そう思って顔を上げて、

「え？」
「え？」
思わず自分の目を疑った。

それくらい、教壇に立つその少女は美しかった。人間離れしていると言ってもいい。周りを見ると、男女ともかなりの人数が心を

奪われたかのように見惚れていた。

まず目を引くのは、その長い髪。腰まで届こうかというその長髪の色は見事な白銀だ。ほとんど白に近い白銀。それが雪のように白い肌や華奢な体躯とよく合っていて、どこかのファンタジー世界のお姫様がそのまま抜け出してきたのではと疑ってしまう。

顔を上品な顔立ちで、見た感じ百四十もなさそうなほどの低身長が保護欲を掻き立てる。ますますお姫様のような印象だ。

「次、どうぞ」

どこか疲れたような斎藤先生の言葉でハツとなり、次の生徒が慌てて前に出た。

「……です。装備科で……」

自己紹介が再開された。再開、というのもおかしいかもしれないが。

それにしても可愛いやつだった。いまだに何人が上泉の方をぼーっと見つめているやつがいるし。

「す、鈴木桜すずき 桜ですっ！」

また中々可愛いやつが教壇に立った。実は当たりなクラスなのだろうか。

黒髪のショートヘア。くりつとした垂れ目が印象的だ。

「探偵科で、ええと、しゅ、趣味は料理です。特技は、ええと、ええと……あ、ありません！ごめんなさいっ！失礼します！」

鈴木はぺこりと頭を下げると、そそくさと自分の席に戻ってしまった。

慌ただしいやつだな。

「……です」

順番が流れていく。鈴木の後には特に興味を引くやつはいなかった。そして、俺の前の席のやつが教壇へ向かう。

次は俺か。

前のやつが戻ってくるのと入れ違いに、俺は立ち上がると教壇へと歩いて行った。

「松永秋空だ。探偵科。趣味は読書。特技は手品だ。よろしく手品、と言っても麻雀やトランプなどでのイカサマのことだ。あまり人前で披露できる類のものではないが……まあ嘘は言っていない。」

言い終わるや否や席に戻る。少し緊張したが、別段おかしい点はなかったはずだ。

「まっながはつき松永葉月です」

問題はこの姉だ。

姉が名前を名乗った途端、教室がざわめきだす。

「松永葉月って、あの？」「天才とか言われてるんだろ？」「あれ？そついえばさっきのやつも松永って言ってなかった？」

「はいはい静かに」

斎藤先生が手を叩くと、ざわめきは徐々に引いていった。

「えーっと。続けていいのかな？……改めまして、松永葉月です。さつき自己紹介してた、秋空の姉です」

余計なことを……

「探偵科です。趣味は料理。特技は速読かな？一年留年してるけど、気にしないで気軽に声をかけてくれると嬉しいです。よろしくね」
そう言っつて姉は席に戻った。姉も俺も、この後何かしら色々聞かれるんだろうな……留年生なんて珍しいし。

宮島、宮中、森……八木、山本……途中ちょっと変なやつはいたものの、順調に年始の恒例行事は終わろうとしていた。

ここまでは。

「横井琴音よ」

（あ、あいつ……！）

すっかり忘れていた。いや、忘れたかった、の方が正しいのかもしれないが。

「探偵科。趣味は漫画とTRPG。特技はエッグドロップ」
どんな特技だよ……

しかしそれ以外はいたって普通の自己紹介、か。

「そして、松永秋空！私はあんたに言いたいことがあるわ！」
「……………」

俺はその言葉にうつとうしそうに目線だけやるが、内心めちゃくちゃ焦っていた。

全然普通の自己紹介じゃないじゃないか。

「え？何々？」「あいつ、あの可愛い子と知り合いなのか？」「松永許すまじ」「もしかして付き合ってるんじゃない？」

……………色々と飛躍しすぎだろう……………とてもこいつらが推理が得意な集団とは思えない。

それよりも、俺は目立つのが嫌いなのだ。なのに何でこんなことに……………」

「秋空！あんた、さっきの話に納得してないでしょ。だから今、クラス全員の前で誓ってもらおうよ」

何だと？『さっきの話』？って、まさか……………」

「おいお前……………」
まさかクラス全員の前で「奴隷になれ」なんて言い出すんじゃない……………」

ここにいるやつらがそんなこと聞いたなら、絶対面倒なことになる。質問攻めにあうこと必至だ。

「ふふ。察しがいいわね。まあ昼休みに私と付き合っんなら、言わないでおいてあげる」

「……………」
「あ、悪魔かこいつは……………」

「どうするの？後三秒以内に決めなさい」

「え？」
「さーん……………」

「わかった！昼休みだな！？いいいぜ、ちょうど暇だったからな！」
俺はもう、そう答えるしかなかった。

うつうつ……………何で俺がこんな目に……………
「よし。決まりね。昼休み、楽しみにしてるから」

意味ありげにそう言つと、横井は自分の席へと戻っていった。

「おいおい。昼休みに二人だけでデートだと」「何だあいつ。地味なやつだと思ってたのに、あんな可愛い彼女がいたのか。まじで爆発しろ」「そういえば、あの二人始業式いなかったよね。二人で何かしてたんじゃ」

教室はいまだにざわざわしているが、斎藤先生はもうどうでもよくなったのか、止めるつもりはないらしい。

「じゃあHR終わります。あんまり騒いで他の教室に迷惑かけないように。では」

斎藤先生はそのまま教室を出て行った。先生、多分誰も聞いてないぞ……

「お前、どういつつもりだ？」

戻ってきた横井に問い詰める。

「話すくらい、別にいいでしょ？そんなに時間は取らせないわよ」
涼しい顔でそう答える横井は、それに、と言葉を続けた。

「秋空にとつても悪い話じゃないはずよ」

「……わかった。話だけは聞いてやるよ。けどその代り、また奴隷とか何とかふざけたこと言うのはなしだ」

「私は本気なんだけどね……まあいいわ。続きは昼休みに話しましよ」

話は終わりと言わんばかりに、横井は本を取り出して読み始めた。……わからんやつだ。破天荒なやつかと思えば、あんなことをしてここまで冷静でいられる。

大物、なのだろうか。

少なくとも、これだけは自信を持って言える。

俺はこいつが、ものすごく苦手だ。

「はあ……」

俺はため息をつくのと、周りの野次馬をどうするかについて思案を巡らせた。

幼女の需要と、平穏な昼休み（前書き）

今回は雑談パート。

幼女の需要と、平穏な昼休み

昼休み。クラスメイトからの質問責めを何とかまいた俺は、横井との待ち合わせ場所である理科棟の屋上にいた。やつらも、流石にここまで追ってくることはないらしい。この後教室に戻るのがいささか怖いが……

横井はどこだろうと辺りを見回すが、どうやらまだ来ていないらしい。横井もクラスメイトをまくのに必死なのだろう。俺は携帯でもいじりながら気長に待つことにした。

「さつき教務科から出てたメールさ。二年生の男子が自転車を爆破されたってやつ。あれ、キンジじゃない？」

数人の女子がしゃべりながら屋上にやってきた。屋上つてあまり来たことがないが、昼休みは混んだりしそうなイメージだ。出来ればさつきと用事を済ませてしまいたいところだな。

「あ。あたしもそれ思った。始業式に出てなかったもんね」

「うわ。今日のキンジってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

キンジの話題か。チャリの件はともかく……『アリア』？どうもまた面倒ごとに巻き込まれてるみたいだな。

「お待たせ」

いつの間にか後ろからトントンと肩を叩かれていた。

「おお。早かったな」

携帯を閉じて振り返ると、横井と目があつた。それにしても小さいな、こいつ。

「奥の方に行くわよ。色々、聞かれないようなことも話すかもしれないし」

「了解」

何を話すつもりだろうと思ったが、あえて何もツッコまないことにした。

屋上の奥に陣取ると、俺は弁当の風呂敷包みを広げた。ちなみに弁当は姉さんが作った。俺もたまに作るが、基本毎日姉さんが作ってくれていて、本当にありがたい。

「って言うか、お前それで足りるのか？」

横井は手に、購買で買ってきたであろう焼きそばパンを持っていたが、どうやらそれだけのようだった。

「足らなかつたら秋空の弁当から少しもらっわ」

「……まあいいけどさ」

「いいんだ……秋空って結構お人よしよね」

ちよつと呆れたように横井が言った。

「そんなことを言われたのは初めてだな」

「そう？何だかんだで私の話も聞いてくれるし」

それはお前のせいだろう………と思いつながらも口には出さなかった。二段になっている弁当箱の蓋を外す。中身はほとんど余りもの詰め合わせだが、姉さんの謎の技術によりとてもそうは思えないほどに美味い。

「じゃあ、いただきます………」

「もぐもぐ。美味しいわねこのだしまき卵」

「……別に食うのはいいんだが、せめて自分のパンを食いきってからにしてくれ」

「どんだけ食い意地張ってるんだよ………」

「で？話があるんだろ？」

ピリツとのりたまふりかけの袋を開けながら、俺は横井に言った。「ええ。って言うてもさつき保健室で言ったのと同じよ。私とチームを組みなさい」

「………」

さて、どうしたものか。

冷静に考えればこの申し出、別に受けてもいいはずだ。

だがいくつかの疑問と、会ってまだ数時間の横井に対する警戒心

が俺を踏みとどまらせている。

ぶっちやけ、胡散臭い。

「まず聞くが、何で俺なんだ？」

とりあえずそう尋ねると、横井は焼きそばパンにかぶりつきながら、

「んー。勘？」

「真面目にしないと話聞かないって言ったよな？」

そしてパンをくわえたまま上目遣いはやめる。

「冗談よ。いやまあ、あながち間違っではないんだけどね」

お茶のペットボトルの蓋を開けながら、横井は言葉を続けた。

「秋空はどうして今朝のチャリジャックがわかったの？」

「随分と急な質問だな。どうしてって言われても……普通気づくだろう。遠山は相当焦ってたみたいだし、並走してるセグウェイは明らかに不自然だし……」

そこまで言うのと横井は深いため息をついて、

「普通気づけないわよ。まあAランク武偵が十人いたとして、そこまでの観察力を持つてるのが六人、それらの情報をチャリジャックと結び付けられるのは一人いるかいないかってところね。それにチャリジャックまで思い当たったとして、それを信じられる人なんてそうそういないわよ」

「それはAランク武偵を舐めすぎだろう……ちなみにお前はどうかって気づいたんだ？」

「私は普通にサドル裏のプラスチック爆弾が見えたのよ」

「……」

「な、何よその憐みに満ちた目は……」

「……いや、何でもない」

サドルの裏側が見えるくらいの身長って……と言いつつになるも、すんでのところで言葉を飲み込んだ。

「何よ何よー！いいわよ私は低身長で！需要はあるんだから！」

「それは……一部の紳士達限定では？」

まあこう見えて俺も紳士なんだが。

「うるさい！今は幼女が微笑む時代なんだ！今にわかるわよ！」

「声マネ頑張ったな。全然似てないけど。……この俺の顔より醜く焼けただれろ！」

「え、すごい。結構似てる……」

横井は感心したのか目を丸くしていた。

「こんなのも出来るぞ。……イメージするのは、常に最強の自分だ」

「おお……！」

「気を付ける。触れると一瞬で浄化されてしまうぞ」

「おお！すごいじゃない！」

「……最近の女子高生って、今のネタ全部わかるのか……何か、知りたくなかった現実を知ってしまった気がする」

急激にテンションの下がる俺とは裏腹に、さっきまで怒っていたのが嘘のように、横井は楽しげな様子で言った。

「わかるわよそれくらい。どれもメジャーなネタじゃない」

「まあそうだけど……って、かなり話が脱線したな。何の話してたっけ」

確か……横井の身長が低いつて話だったか？

「今、何かすごく失礼なこと考えてなかった？」

ふと見ると、横井が笑顔で震えるこぶしを握っていた。

「い、いや何も？」

こ、怖すぎる！やっぱりまだ怒ってるのか。

「言っておくけど、私がサドルの裏側を見たのはたまたま携帯を落として、その時にしゃがんだからよ」

「そ、そうか。そうだろうな……」

まあさすがの横井でも、サドルの裏を見上げるのは無理があるからな。多分。

「わかればいいのよ。わかれば」

そう言つと横井の顔から笑みが消え、握りこぶしも解いてくれた。笑顔があんなに怖いものだとは思わなかった。

……つて、また話がそれたな。

「話を戻そう。何で俺なんだ？」

「え？何が？」

「……」

もつやだこいつ……

「お前、自分が何しに来たか完全に忘れてないか？」

「い、いや覚えてるわよ。ただちょっと、秋空のせいで話がそれたから、それで……」

なぜ俺のせいというところを強調するのか。

「はいはい。オタクつてのは話が盛り上がると周りが見えなくなるからな」

「それは明らかに偏見だし、その自分は違うけどみたいな言い方は腹立つわね……」

そう言つて、横井はパンの最後の一口を頬張った。

「じゃあ、話を戻すわよ。まず秋空が欲しいと思つた理由は、今朝のチャリジャックを一目で見抜いた洞察力よ」

「いや、だからあんなの普通気づくつて」

「……まあいいわ。それにそうでなくても、秋空は去年、ある事件を解決してる。遠山キンジと二人でね」

「……」

まさかあの事件を引き合いに出されるとは……いつの間に調べたのか。

「そうだな。確かにそんなこともあつた。あのときは遠山の優秀さに、本当に助けられたな」

「そうね。確かに遠山キンジは入学当時Sランクで、入学試験で教官を全員倒すくらい優秀な武偵よ。でも今はEランクだし、何よりホテル全体に爆弾を仕掛けて人質を取つた犯人グループを、たった一発の銃弾で仕留めるのはかなり難しいんじゃないかしら？」

そんなことまで調べたのか。一体どこまで知っているのやら。

「強襲科のSランク武偵は、一個中隊と同じ戦力があるんだ。それ

くらい出来てもおかしくはないだろう。それに一発で済んだのは運がよかつただけだし、警察の助けもあったからな」

「警察？どうせ最後に犯人グループ取り押さえただけとかじゃないの？」

「参ったな。どうやら全てお見通しらしい。」

「あんたが何をしたのかまではわからなかった」

「そりゃそうだろう。俺は何もしてないんだから。」

「けど、これくらい落ちこぼれの私でもわかつたわよ。秋空が作戦を考えて、遠山キンジがその通りに行動した。そうでしょ？」

「……まあ確かにその通りなんだが……何と云うか、誇張しすぎじゃないか？俺は作戦なんて呼べるほどの指示をしたつもりはないんだが」

「そもそも遠山なら、俺の指示なしでも充分立ち回れただろう。本気出したあいつは、通常の三十倍程強いらしい。」

「とにかく、私から見ると秋空はそこそこ優秀な武偵よ。だからさっさと、秋空の持つ智謀、全てを私に捧げる奴隷になりなさい」

「微妙に某今孔明を意識してるのはわかったが、そんな要求を受け入れるやつがいると思うか？」

「奴隷って……」

「じゃあチームメイトになってって言ったら？」

「却下ア」

「うざ！言い方うざっ！」

「何か一矢報いた気分だ。」

「冗談はさておき、まだ疑問は残ってる。もう昼休み終わりそうだし手短かに話すぞ。お前、ランクは？」

「Sランクよ」

「……で、ですよねー」

「わかつたの？」

「A以上だろ？なとは思ってた」

「行動力は実力に比例する。少なくとも俺はそう思っている。それ

は、いわば実力がもたらす副産物の一つだ。

俺が見た限りでは、琴音の行動力は並みのものではない。何せ自己紹介があれだからな……多分、俺が見た中で誰よりも行動的なやつだ。衝撃的でもある。

「俺Dランクだぞ？本当に俺でいいのか？」

「いいのよ。まあ、あんたの洞察力も潜在的なものみたいだし、これから私がビシバシ調教してあげるわ」

「調教って言うな。……じゃあ、最後の質問だ。何でこんな早い時期にメンバー集めなんだ？」

そう言つと、琴音はふいっとそっぽを向いて、

「……別に。早いに越したことはないでしょ。兵は拙速を尊ぶって言うし」

「……そうか」

俺は短くそう答えた。

なぜかその横顔は、聞かれたくないと言っているような気がしたから。

気のせいだと思うが。

「で？どうするの？」

「ん？何が？」

「……あんた中々嫌らしいわね」

さっきの「え？何が？」のお返しは、どうやら気に入ってもらえたようだ。

「そうだな……奴隷なんてのはごめんこうむるが、チームメイトにならなつてやるよ」

「ホント？まあ秋空つてぼっちみたいだから、こんないい話断ることはないと思つてたけど」

「お前何てこと言つんだ……」

まあ特に断る理由もないし、琴音とは話も合いそうだ。いい話なのは確かだろう。

「ただ、さっきも言つたが俺はDランク武偵だ。お世辞にも優秀と

は言えない。可能な限り任務には全力を尽くすつもりだが、もし俺の実力が不満ならいつでも解雇してくれて構わん」

食べ終わった弁当の空箱を片付けながら、俺は言った。

「よし。じゃあ決まりね。これからよろしく」

「ああ、よろしく。……コンゴトモ ヨロシク」

「そんなわざわざ言い直さなくても……」

琴音は呆れたような、でもちょっと嬉しそうな様子でそう言った。これが俺の基本平和で、ちょっと慌ただしい日々の幕開けだった。

苦勞人の知り合い（前書き）

今回もg d g dと雑談パート。

苦勞人の知り合い

午後七時半。

クラスのやつらからようやく解放された俺は、家の近くにある本屋のライトノベルコーナーにいた。そこそこ大手の本屋の支店で、ラノベやTRPG関連の本も結構置いてあるところだ。

帰り道の途中にあるということもあって、俺は要もなくここに寄ることが多かった。つまるところ冷やかしのだが。

俺は平積みされている新人賞受賞作品を一冊手に取ると、立ち読みを始めた。

(……これからどうなることやら。Dランクの俺がSランクの琴音と組んだんだ。風当たりは強いだろうな)

読んでからしばらくして、本の内容そっちのけでそんなことを考えている自分がいる。

あの屋上でのやり取りの後、琴音からは何も話しかけてくることはなかった。勿論俺からも話しかけに行くことはない。

俺はこれ以上クラスのやつらに話題になりたくない。それは、多分琴音も同じだろう。お互いそのことはよくわかっていようだった。

だが自己紹介のときの琴音の行動が気にかかる。俺と話をするなら、他にも方法はあったはずだ。なぜ、あんなに目立つような真似をしたのか。

それにまだ気になることはある。

自分で言うのもなんだが、俺は結構人見知りをする。後、若干コミュ障の気がある。そんな俺がほぼ初対面の、しかも苦手意識のある女子相手にあそこまで自然に会話出来るとは……話題が合うとは言え、琴音とは初めて会った気がしないほどだった。

もしかしたらそれは、琴音の人柄が成せる技なのかもしれない。

「ふーん。中々見る目があるじゃない」

ふと耳元で、鈴の音のような綺麗な声が聞こえた。ふわりと石鹸のような、甘いい匂いがしたかと思うと、

「う、うわっ！」

琴音が背伸びびして俺の手元の本を覗きこんでいた。サラサラとした亜麻色の髪が一瞬手に触れる。

「び、びっくりした……いつの間に……」

「秋空が立ち読み始めたくらいからよ」

驚いた。まだ心臓がバクバク鳴っている。

まさか琴音のことを考えているときに、ピンポイントで本人登場とは。

「それ、面白いわよ。個人的にはオススメ」

「お、おお。そうか」

同様の余韻が残ったまま、俺は何とか返事をした。

琴音はくすつと笑うと、

「びっくりしすぎよ。仮にも武偵なら、これしきのこととで動揺しない」

「……了解」

「で、秋空は何を買いにきたの？」

「特に何も。面白そうなものがあれば買うかも程度。お前は？」

そう尋ねると、琴音は肩をすくめて言った。

「同じよ。何か面白いラノベない？」

「そうだな……って言ってもお前が何読んでるか知らないし」

「まあそうよね」

言いながら、琴音は本棚の一冊に手を伸ばす。

「あー、それは俺も表紙につられて読んで読んだな」

「へー。内容は？」

「そこそこ。気軽に読めるのがいいところか」

「んー、じゃあやめとく」

典型的なオタク同士の会話。人から評価されたものほど、そんなに面白くないものだ。

俺も読んでいた本を元あった場所にそつと戻した。

「俺はこれからコンビニ寄ってから帰るけど、お前はどつするんだ？」

「私も着いてく」

「え？」

「何よ」

「いや、何でも」

少々意外だった。まさか着いてくるとは。何か話でもあるんだろ
うか。考えても仕方ないが。

本屋を出る。日はとつくに沈みきり、空は闇色に包まれている。
街灯と建物の明かりが街を照らしていた。

「なあ。聞きたいことがあるんだが」

「また？武偵なら自分で調べるなり、推理するなりしなさいよね」
「じゃあ今からお前から話を聞いて調べる」

揚げ足を取つてみると、琴音はむすつとした顔で、
「……しょうがないわね。何？」

琴音は憮然顔だが、それでも質問には答えてくれるようだ。

「俺以外に、誰か決まつてるチームメンバーはいるのか？」

「いないわ。でも狙つてるのはいる」

「誰だよ」

「SSRの上泉久遠」

「……あ、あいつか……」

上泉久遠。聞き覚えのある名だと思つたら、今朝の自己紹介のと
きのあいつか。

「一応理由を聞いておこうか」

「頭脳面は私と秋空で充分だから、戦闘力の保管よ」

「……だからつて何でそんな競争率高そうなやつを？」

武偵は超偵に勝てないと言われている。SSRの生徒はそれほど
までに圧倒的だ。恐らく、あの上泉も例に漏れず。

その上あの容貌だ。引く手数多なのは間違いない。

「普通に強襲科のAランクとかじゃ駄目なのか？」

「そういう妥協をしたくないから、こんな早くに動いてるのよ」
「なるほど。ちなみに他には誰を？」

「狙撃科のレキ」

「ああ……」

有名なやつだな。『ロボットレキ』の異名で知られる、狙撃科の麒麟児だ。極端に無口らしい。

「他は？」

「強襲科の神崎アリア」

「アリア？」

俺は昼休みにその名を耳にしていたのを思い出した。詳細は全くもって不明だが。

「誰だそいつ」

「知らないの？」

琴音は信じられないと言いたげな顔でこちらを見上げてきた。

「そんなに有名なのか？」

「有名も有名。ここに来る前はロンドンの武偵局にいて、一度も犯人を逃がしたことがないっていう天才よ。『双剣双銃』^{カドラ}って呼ばれてるわ。言うまでもなくSランク」

「一度も犯人を……？ そんなやつが……知らなかったな」

「知っときなさい。それくらいは」

呆れたように琴音が言う。

「けど、随分ランクの高いやつばっかだな」

「私だって、今言った全員をメンバーに加えようとは思ってないわよ。でも、仮に一人でも入ってくれたら心強いでしょ？」

「んー……そんな上手くないだろ」

数撃ちや当たる理論。いや、的が多いと考えると逆数撃ちや当たる理論か。

「大丈夫よ。この学校、強いのは腐るほどいるから。それに……最悪誰か一人はチームに入る勝算があるわ」

「勝算？」

「それはこの後説明するわ」

「この後……？」

「それは……」

「ほら、着いたわよ」

ふと目を上げると、夜闇に光る牛乳瓶の看板が見えた。

扉を開けて中に入る。時間帯のせいだろうか。少し混んでいるよ
うな気がする。

「……ん？」

「どうしたの？」

「いや……」

あそこにいる、なぜか口尖らせて立ち読みしてるやつは……

「遠山？」

「……あれ、松永？」

読んでる手はそのままに、顔だけ振り返ったそいつは、やはり遠
山キンジだった。

「よかった。生きてたんだな」

周知メールでわかっていたこととはいえ、こうして会って怪我一
つないのを確認出来たのは本当によかった。

「どういうことだ？」

「今朝のチャリジャックお前だろ。お前が青い顔で必死に自転車こ
ぐの見てたからな」

「いたのかよ！じゃあ助けろよ、この薄情者！」

「おいおい。俺が行っても足手まといになるだけだろう」

「お前弱いけど爆弾の知識だけはそこそこだろ。解除くらいしやが
れ」

見ると遠山は額に青筋浮かべていた。

「ねえ、そいつ誰？」

「琴音がそう尋ねてきた。」

「遠山キンジ。俺の……知り合いだ」

「一番哀しい関係じゃねえか」

遠山は読んでいた近代麻雀を戻すと、こちらに向き直って言った。
「けどまあ、お前にも彼女が出来るとはな。一応祝っておくよ。名前は何ていうんだ？」

「え？」

「か、かか……」

遠山の言葉に目に見えて赤面する琴音。あれ、琴音ってそんなキヤラだったのか。

「カカロット！」

「誤魔化せてないぞ」

一応そう一言ツッコんでから、

「こいつは……」

「わ、私と秋空は……そ、そんなんじゃない！恋愛なんて……くっだらしない！」

「……ということだ。こいつはただのクラスメイトだよ」

そんな大声で強く否定しなくても……他の立ち読みしてる人に迷惑だろ。

「え？あ、ああ。悪い」

遠山もそこまで強く言われると思ってなかったのか、少し驚いた様子だ。

「わ、私は買う物あるから、ちょっと向こう行ってる」

相変わらず赤面したまま、琴音は逃げるようにどこかに行ってしまった。

「よく似たやつがいたモンだな……」

「ん？何か言ったか？」

「何でもねーよ」

遠山が何か呟いたのだが、聞き逃してしまった。

遠山は棚から漫画を一冊抜き取ると、

「まあ、俺はそろそろ帰る」

「あれ、漫画買いに来ただけ？飯買いに来たんじゃなかったのか？」

遠山とこのコンビで会うことは多い。遠山は寮からすぐ近くにあるし、俺は帰り道の途中にあるからだ。遠山は大概いつも夕飯を買いに来ているのだが、今回は違ったらしい。

「今日は違う。実は家追い出されてな……」

「は？」

「いや、朝から変なやつに付きまとわれてな。家まで押し付けてくるわ、ももまんは七つ食うわ、奴隷になれなんて言いやがるし……拳句の果てには出ていけて……」

お、おい。何か愚痴り始めたぞ……疲れ切った遠山の顔から察するに、どうやらよほどそいつに迷惑しているらしい。

……つて、ん？奴隷になれ、だと？

「……よく似たやつがいたモンだな」

「ん？何か言ったか？」

「何でもねーよ」

『奴隷になれ』。流行ってるのだろうか。

「まあとにかく、俺はそろそろ戻るよ。じゃあな」

「ああ、またな。何か知らんが頑張れよ」

軽く手を挙げて、互いに別れを告げると遠山はレジへと向かった。

「で、あんたはここに何しに来たのよ？」

「うおおっ！きゅ、急に話しかけるな……」

本日二回目。琴音は身長が低いせい、近づかれても気づきにくい。

「まさかあいつと雑談しに来たんじゃないでしょ？」

「そりゃな。お前の買い物は済んだのか？」

言いつつ、さっき遠山が読んでいた近代麻雀を手取る。

「ええ。あんたは？」

「これ買っただけだな。つてか、これ買ったら俺は帰るんだが……お前の『勝算』とやらをまだ俺は聞いてないぞ」

そのままレジまで向かうとして、

「だから、この後話すっていったでしょ。あんたの家で」

その足が凍りついたように止まった。

「……え？」

「どうしたの？早く買ってきなさいよ」

「いやいや。冗談だよな？」

今こいつ、俺の家がどうか言わなかったか？

「外で待つてるわねー」

なぜか楽しそうに笑みを浮かべながら、琴音はコンビニを出ていった。

「え、ちょ、待て……」

俺の伸ばした手も虚しく……

(確か、今日は姉さんの帰りは遅いんだったよな……)
俺はすでに、かなり消極的な思考を始めていた。

「おい。どういうことだ？」

自宅。リビングのテーブルに買ってきた雑誌を袋ごと置くと、俺は琴音に問いかけた。

「何で、お前が家まで着いてくる」

「まあまあ。PS3あるんだし、ここはとりあえずス 4でも、やらないか？」

「やらねーよ。うちはアケコン一つしかないんだよ」

それよりもだ、と俺は言葉を続ける。

「お前何しに来たんだよ」

「決まってるでしょ？さっきの『勝算』について説明しに来たのよ」

「じゃあもうそれだけ言っつてとつと帰れ」

そもそも俺の家で説明する必要もないだろうに。

「上泉久遠、レキ、神崎アリア。この三人のうち最低一人を、秋空が口説き落とす。以上」

「は？」

俺が？

「じゃ、私は帰るわ」

「待て待て待て待て」

帰ろうとする琴音の襟首をつかんで引きとめる。

「何よ。帰れって言ったり待ってって言ったり、はっきりしなさいよね」

不機嫌そうな顔で琴音は振り返った。

「お前、そのどこが『勝算』なんだ？」

「？」

「なぜそこで首を傾げる……」

こいつ本当に探偵科のSランクか？

「私は秋空なら、一人くらい余裕だと思っただけど。まあいいわ。やるだけやってみなさい」

「やだよ」

Sランクって言ったら天才だぞ？天才ってのは大概相手しにくい変人ばつかなんだよ。レキはそのいい例だ。

しかもコミュ障気味の俺にそんなこと出来るわけ……

「もし一人でも仲間に出来たら、ご褒美にポーカロイドの抱き枕カバー一式をあげるわ」

「やらせていただきます」

その程度なら余裕だ。俺を誰だと思っている。

「秋空って結構単純ね……まあいいわ。任せたらからね」

そう言っつて、琴音は勝手にソファーに寝転がった。スカートがまぐれて、銃と一緒に白いふとももとその奥が少し目に映る。俺は自分でわかるほど顔を赤らめて、慌てて目をそらした。

……… 琴音の装備はSIG Sauer P230か。覚えておこう。

俺は一瞬だけ琴音の方に視線を戻すと、そう心に留め置いた。装備を確認しただけだ。他意はない。白だった。

「というか、お前の『勝算』って結局なんだったんだ？」

「それを考えるのは、秋空の仕事よ」

「ああ、そう……」

まあいいや。抱き枕カバーのためだ。何かしら考えよう。

「で、お前どうすんの？帰るの？」

「このまま帰るっていうのもねー。泊まっていてもいい？」

「いいわけないだろ」

「ここをどこだと思ってるんだ。姉がいるとはいえ、仮にも男の家だぞ。」

「はあ……」

なぜか琴音はため息をつく、ソファー上体だけ起こして、

「おい、そこに座れ」

「だから似てないっての。無理すんな」

そもそもあの声マネは女では無茶だ。

「秋空はなぜか私に排他的な態度を取るけど、私達知り合ってからまだ数時間よ？そんなんでチーム組むんなら、もっとお互い一緒に行動して、交友を深めるべきだと思うけど」

俺はその言葉にとっさに答えることが出来なかった。

「……悪い。正論だな」

女の前で排他的な態度になってしまうのは、俺の悪い癖だ。直さねば。少なくとも琴音の前では。チームメイトなのだから。

「わかればよろしい。じゃあ、今日は泊まっていくから」

「それは駄目だ」

「何だよ！」

「逆に俺が聞きたいんだが……何で泊まりたいんだ？」

交友を深めるだけなら、学校でいいはずだ。

「それは……から」

「え？」

琴音が俯いて何か言ったようだが、よく聞こえなかった。

「何だつて？」

「だから……ここまで話題合う相手、珍しいから……もっと話したいなって……」

顔を朱色にして、モジモジと話す琴音。おかしい。現実の女の子がこんなに可愛いわけがない。

だが琴音の言ったことは俺も同じだった。俺もいわゆる、そういうネタが通じるのはネット上以外では琴音が初めてだ。唯一のオタク仲間の峰理子はただのギャルゲー好きだし。

「はあ。しょうがないな……」

今度は俺がため息をつく番だった。

「何、してるの？」

俺は鞆からノートを取り出すと、一ページ分ちぎり取った。

そして後ろを向いて、それをテーブルに置いた。同じく鞆から取り出したシャーペンで書く。

「ほら」

書き終わったそれを琴音に渡す。

「俺のメアドとスカイプ名だ。何か語りたんならいつでも相手してやるよ。あ、でも今期のアニメの話は駄目だ。前期もあんまり観てない」

「秋空……」

「まあだからとりあえず今日は帰れ。そんで帰ったらメールしてこい。俺も……お前と色々話したいしな」

これは、紛れもない俺の本心だ。こいつと話するのは中々楽しい。そうじゃなきゃチームメイトの件の承諾してない。

「……ありがとう」

そっぽを向いて、照れ隠しのように琴音は言った。言って、ノートの切れ端をポケットに収めた。

「じゃ、じゃあ帰るね」

まだ少し顔を赤らめたまま、琴音は立ち上がった。

「ああ。家まで送っていくよ」

「え？いいわよ」

「もう八時だぞ。女の子一人じゃ危ねえよ」

「でも……」

「いいから。ほれ行くぞ」

廊下に二人、縦に並んで歩く。俺が先頭。横に並べないことはな

いが、狭いのでお互い自然と縦になっていた。

それが悲劇の始まりだった。

ガチャリ。

「！」

ドアに鍵が差し込まれる音。それに俺は、思わず硬直してしまっ
た。

姉さんだ。帰ってきたんだ。

間に合わなかった。

「え……？きやつ！」

当然、琴音が俺にぶつかって……

「うおっ！」

折り重なるように、俺達は廊下に倒れた。

本屋でも嗅いだ甘い香りが鼻腔をくすぐる。少し遅れて、肩に髪
の毛がかかると感觸がした。

ガチャ、ガチャ。

鍵が回され、引き抜かれる音。

まずい。

こんな状況。姉さんに見られたら絶対誤解される。

頼む！開くな！

「ただいまー」

俺の必死の願いも虚しく。

運命の扉はあっけなく開かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2915y/>

緋弾のARIA お人よしな梟雄

2011年11月17日03時26分発行